蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-32-2811
◆スタッフ◆
小林国二・高橋潔・室賀清輝
高橋利春・屋代 健・飯泉隆史
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

庭の片隅でたたずむ仏様

ご家族の皆さまでご覧ください

『光陰矢の如し』

翠巖　弘

今年の夏は毎日のように猛暑日。酷暑・猛暑どころか、極暑の日本列島でした。熱帯夜もつづき多くの方が熱中症で病院に搬送されたり、尊い生命を落とされた方も大勢おられました。一方で、記録的な豪雨も多発して多くの方々が犠牲になられ、今も普段の生活に戻れない人々が大勢おられます。

例年ですと安善寺の庭では不思議なくらい、暦での立秋を迎えると虫の音が聞こえはじめますが、今年の長岡はお盆まで極暑がつづき、そのうえ雨が長期間降らなかったせいか、一週間くらい遅れて虫の音が聞こえはじめました。私の記憶している限りでは初めてのことです。

世界各地でも異常気象が伝えられており、地球温暖化が原因ではともいわれております。それが事実であるならば、私共人類は一度立ち止まり、同じ地球に生存するあらゆる生命との関わり、生活のあり方、価値観の優先順位等々を深く思慮するべき時だと思います。

陶潛（365～427）の『陶淵明集』の「雑誌」の中の一句の最後に、「盛年重ねて来たらず、一日再び晨なり難し、時に及んで当に勉励すべし、歳月は人を待たず」の四句があります。〔若く元気な年は二度とこないのだ、一日のうちに二度朝がないように。だからよい時を逃さずに存分に努めるべきなのだ、歳月は我々を待っていてはくれない。〕

臨済宗の始祖の臨済義玄禅師も、『臨済録』の「示衆」に「光陰は空しく過ごすべからず」と示されております。「光陰惜しむべし」や「光陰矢の如し」などの言葉もあります。

私も昭和五十一年十月、三十九歳の時、安善寺廿七世の住職にさせて戴きまして、早三十二年になります。まさに光陰矢の如しです。過去を振り返ってみると、道元禅師様の和歌、「徒に　過す月日は　多けれど　道をもとむる　時ぞすくなし」の如く、空しく月日を過す日々が多かったと自責の念を感じいります。

来年十月には廿八世にと住職が変わる予定です。住職としての一年余りを徒に過さず、毎日を心して過ごしたいものです。

然るに、慚あり、常に清浄を求め、執着なく、謙譲に、清浄に活命し、智見ある人には生活は難し。　『法句経』

『晋山結制・退董・先住忌大遠忌法会』にあたり
昭和六十一年厳修大法要の回想

総代　小林 政雄

壇信徒の皆様には如何お過ごしでしょうか。猛暑の続いた今年の夏も漸く秋の彼岸の季節となりました。常日頃は菩提寺、安善寺様のために御尽力を賜り厚く御礼申し上げます。

今年一月の初月忌、総代・世話人会で、龍弘和尚様より「来年十月六日(日)に、自身の退董と真弘副住職の晋山式、安善寺廿六世の世三回忌、並びに何人かの世代様方の大遠忌法要を執り行いたい」との話しがありました。今年一年の行事予定と共に新年の主議題となりました。

昨年来、或は以前から時節や環境など検討、熟慮の上のことと、出席者全員が拝聴し、大行事と感じ緊張された様子でした。私は、今から三十二年前の昭和六十一年十月五日の大儀式の思い出が蘇って来ました。

廿六世雲巖見龍大和尚退董式、現方丈様の晋山式、記念行事『めざめの集い(法脈会)』等の大法要でした。父の名代から受継いだ世話人で、当時は護持会の会計を任じられていました。

現方丈様と奥様の結婚式の段取り、打合せ等の詳細等の経験があり、晋山式の世話人の方々の段取りの詳細打合せ(計画)、時間割り、役割り、予算の策定などの大役を任され、一生に一度と必死でした。

見龍和尚様はじめ、当時の総代・寒川孝吉様、石丸政治様、太刀川進之介様と関係寺院の皆々様の御指導を仰ぎながらの策定でした。当時の日誌メモには準備打合せは一月から始まり、お役の寺院方と何回も進行等の打合せ、晋山二ヶ月前からは若い寺院の方々が交替で本堂での泊まり込みで、最終には二十名位の寺院方が泊まられておりました。

十月一日～三日は記念行事『めざめの集い』(法脈会)が、四日には午後三時に西堂老師、本寺老師様の到着で、その後、首座の「入寺式」、結制修行期間中の無事を当山の土地神に願っての「土地堂念誦」、翌日の法戦式での本則の提唱、修行中の寺院方の配役をお願いする「本則配役行茶」と行事が続き、その後本堂で参加者一同で食事をされて終了。三日には二十五名、四日には五十名が本堂や庫裏で泊まられました。

当日の五日、寺に宿泊の寺院方は五時起床、朝課、掃除の後の六時半に朝食、七時半には境内に二張りのテントで、世話人十名で壇信徒の皆様方の受付開始です。七時過ぎより多くの寺院方も到着され、八時前に西堂老師、両本山御専使さまも到着されました。

八時に新命和尚（現方丈様）は安下処、総代の寒川家を出発、神田公園で待機のお稚児さんと合流、行列をつくり八時三十分に山門に到着し、香を焚き、決意表明の法語を唱え、本堂に導かれ勇壮な太鼓が打ち鳴らされる中、本堂中央に進まれ、御本尊様に法語を唱え新任の挨拶です。その後、仏法と寺院を護持する招宝七郎大権修理菩薩に挨拶し、道元禅師様、瑩山禅師様、安善寺御開山、お檀家様の位

牌が祀られている開山堂にて挨拶、中国に禅の教えを伝えられた達磨大師に法語を唱え礼拝し、晋山式は終わりました。

次に結制祝祷上堂の儀式。晋命龍弘和尚さんは、須弥弾上に登り、お香を焚き報恩の言葉などをお唱えし、多くの僧侶の方々との問答。新命和尚に対し僧侶が一人づつ前に出て、「仏道とは」「住職の心構え」とかいろいろな問答で、新命さんの度量等が試されます。迫力のある問答でした。

その後、休憩があり「法戦式」です。第一座となられた現在、昌福寺住職（当時は高校生）鷲見芳正さんの問答が行われました。

その後、参加者がほっとするような、幼稚園児による般若心経の歌に合わせた稚児の舞が披露され、引続きお祝いのお経「祝祷風経」が勤められ、最後に廿六世の退董の儀式が行われ、住職から東堂老師になられました。その後記念写真、会場を移して祝宴、大勢の方々からご出席していただきまして、盛大裡の後、午後三時半でお開きとなりました。

早朝よりの長い行事でしたが、多くの寺院の方々、壇信徒の皆様のご協力により無事終了し、ホッとしたことが懐かしく思い浮かびました。

以上は、予定表からの抜粋に解説、感想を付けました。退董は現職から一般の組織では会長さんになりますのでしょうか「東堂様」、晋山結制が済むと新しい「住職、方丈様」で社長さんでしょうか。

さて、退董式、晋山式は曹洞宗では宗務庁の認可が必要です。廿六世までは安善寺においては世襲ではありませんでしたが、時代と共に世襲が多くなられたそうです。

今回は安善寺様、私共壇信徒にとりましても重要な式典です。そして現方丈様は勿論、真弘副住職様も曹洞宗の若い僧侶として御本山とも係わりながら多くの役職を勤めておられます。前回の季刊八十二号で同封し、御案内申し上げましたが、一生に一度の機会かも知れません。

来年は天皇様も御退位、新天皇様の御即位誕生です。新年号となり、何かと節目の目出たい荘厳な明るい年となりそうです。計画書、詳細日程、予算案が出来次第御案内報告を申し上げます。

皆々様の益々の御健勝を祈念申し上げますと共に、一層の御尽力を賜りますようにお願い申し上げます。

合掌

追記

●藏王山安善寺、曹洞宗　開念
天文十二　西紀一五四三年
（今から四七五年前）

●昭和六十一年十月五日
廿六世雲巌見龍大和尚退董
廿七世翠巌龍弘和尚晋山

●昭和六十二年十二月二十五日
見龍東堂老師遷化
十二月二十八日　本葬儀

●平成元年十月二十二日
前住参回忌法要

●平成五～六年　本堂大改修
開山位牌堂新築

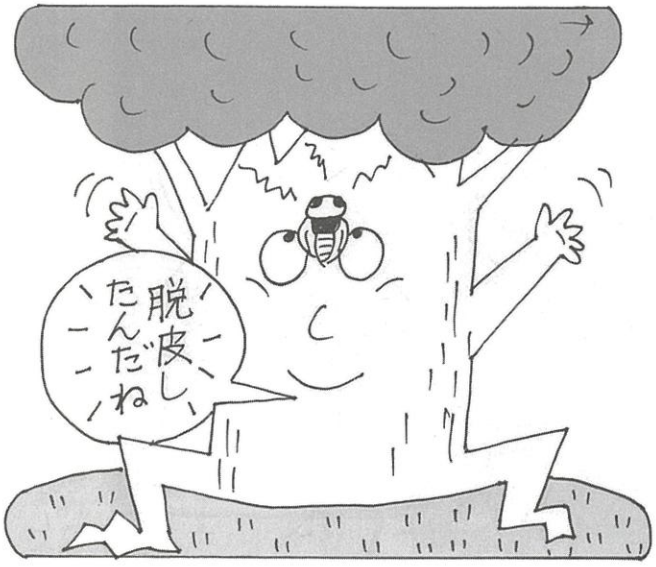
●平成十六年十月の中越地震
本堂改修復興
客殿新築

●平成二十四年十一月十一日
開山長翁存宗大和尚四百五十回忌
廿六世雲巌見龍大和尚廿七回忌
他、七世・十世・十一世・十三世
大遠忌

●（平成三十一年）十月六日（日）
（二〇一九年）
安善寺廿七世翠巌龍弘和尚退董式
廿八世泰忍真弘和尚晋山式
廿六世雲巌見龍大和尚廿三回忌
先住二世・五世・十四世
様方の大遠忌法会

【日々精進(四十二)】
「いのち」の尊さに感謝する心

近藤 真弘



猛暑の続いた夏も終わり気温的には幾分か過ごしやすい日々がやってまいりましたが、台風や大雨のニュースは連日のように流れております。

前号の私の記事で梅雨のことを取り上げさせていただきました。記事を書いていた時は雨が少なく梅雨は恵みの時期と書きましたが、その後の特に西日本での大雨は雨による災害が起こり、多くの尊い命が犠牲になりました。被災地の方々にとっては全く恵みの雨ではありませんでした。改めて文章を書くことに対してあらゆる注意が必要ということを思い知らされました。まずもって犠牲になった方々のご冥福を心からお祈りいたします。

間もなくお彼岸の時期がやってまいります。夏にはうるさいくらい鳴いていた蝉の鳴き声も落ち着いてきました。今年は夏の夜に何度か庭に出て子供と蝉の幼虫を見に行きました。蝉の幼虫が穴から出てきて歩いている様子から、背中がひび割れて成虫が出てくるところ、完全に脱皮して抜け殻にぶら下がっている蝉の様子と、子供たちは興味深そうに庭のあちこちを探し回っていました。

脱皮したての蝉は翌日には見慣れた茶色になりますがその瞬間は透き通るような薄緑色で大人の私も見入ってしまう美しさもありました。

ある日の夕方、家の中に蝉が迷い込んできたことがありました。下の子はその蝉を捕まえてダンボールに入れて飼いたいと言いました。私が「蝉は幼虫の時に何年も土の中にいてようやく地上に出てきてほんの一週間しか自由に飛び回ることが出来ないからダンボールの中で飼うのはかわいそうだよ。」というと、最初はそれでも飼いたいと言ってききませんでした。仕方なく一度は穴をあけたダンボールに蝉を入れましたが、その中で鳴いている蝉の鳴き声を聞いてほどなく自分から「やっぱり逃がしてあげる」と、箱を開けて蝉を逃がしてあげました。

子供が自分の中でどんなことを考えて気持ちが変化したのかはわかりませんが、「やっぱりかわいそう」と思った中には外を飛んでいるときには感じなかったけど、手元に置くことでより生きている蝉の「いのち」を感じたのかなと想うと少し嬉しくなりました。

すべてに「いのち」があること、虫や草木すべてに、その尊さに感謝を捧げられる子に成長してくれたらなぁとつくづく感じました。

お彼岸は中道を感じる時期だと思います。暑くもなく寒くもなく、ちょうどよい季節です。暑さや寒さから解放され、まさに「いのち」を「生きている」ことを感じる大切な時期ではないでしょうか。

お彼岸にお墓をお参りするのはご先祖様のおかげで今を生きていることに感謝を捧げる事でもあります。中道を感じるこの時期に改めて命の尊さを感じ「今日先祖恩」の気持ちで手を合わせましょう。

愛すべき祖母の百年

小林あけみ

私達の祖母は、昨年平成二十九年に百歳を迎え沢山の方々から「おばあちゃん」として親しまれ愛された人でした。

大正六年十月三十一日生まれ、兄四人の末っ子で野球などをし、ヤンチャな少女時代を過ごしたそうです。

祖父を病で亡くしてからは祖母が一人で三人の子を育て、成長を見守り、苦難の中でも本来の性格である社交性、行動力のある祖母は、三味線や民謡、カラオケに旅行と沢山の趣味をもち、私達が子供の頃は夏休みになると毎年、箱根や熱海の花火大会など色々な場所へ旅行に連れて行ってもらい、常に愛情深く成長を見守り続けてくれました。

そんな祖母から私達は人生にとって大切なことを沢山教えてもらいました。それは言葉だけではなく、祖母の人柄や日頃の行動からでした。

あいさつや人に対する優しさ全てに見返りなど求めない潔ぎ良さ、強さ、何より人生は日々勉強だということ。

八十歳まで仕事を持ち、生き生きと自らの人生も楽しんでいた祖母はいくつになっても色々な事に興味を持ち、学び続け、九十九歳を過ぎても日課のお散歩を欠かさず、病気もせずハツラツと過ごしていましたが、百歳を迎える数ヶ月前からは勝気な江戸っ子気質の祖母も横になり休む時間が増え、サポートされる側になってからも、デイサービスや訪問で来てくださる先生や看護士の方々へ常に感謝の言葉と体調を気遣う姿を見て、祖母が今まで歩んだ人生を、人に対する思いやりを改めて思い知らされました。

そして最後に教えられた事、それは全ての事は永遠ではない…という事でした。

百歳と二ヶ月を生き抜き、祖母は突然に天国へと行ってしまいましたが、祖母が生きるために私達に教え続けてくれた沢山の事を心に刻み、祖母が話して聞かせてくれた沢山の想い出と共に、これからの人生を過ごしていきたいと心から強く思っています。

「おばあちゃん、
たくさんの幸せを
ありがとう」

お彼岸

小林国二

暑さ寒さも彼岸までと言いますが、季節的に早く言えば夏と冬が入れ替わると言うことです。今年の夏は異常と思われる暑さが襲い熱中症で大わらわだったと思います。丁度お彼岸を迎える頃ですのでお彼岸について少々書かせて戴きます。

曹洞宗ではお彼岸について解説しておりますのでご覧ください。

彼岸会という行事は、特に日本にて盛んに修行されるもので、古い記録では『日本後紀』巻13の「大同元年（806）3月辛巳の条」に、「諸国の国分寺の僧をして春秋二仲月別七日に、『金剛般若経』を読ましむ」と出ています。「彼岸」という言葉は、「彼方の岸」の略ですから、つまり煩悩の激流である海の「此岸（しがん）」から、修行によって海を渡りきり、輪廻を超えた涅槃の境地に入ることを意味します。

特に菩薩の修行には「六波羅蜜（ろくはらみつ）」と呼ばれる修行の種類がありますが、この「波羅蜜」というのは［パーラミター］の音写で、意味は「修行の完成」になり、それを表す意味の語が「彼岸到（到彼岸）」とされます。したがって、「波羅蜜」＝「彼岸到」とは、「修行の結果、行くことの出来る理想的な場所」です。その修行の完成を期する期間が、彼岸会の一週間になります。「波羅蜜」は、具体的には「六波羅蜜」とされ、以下の内容に分かれます。

①布施（ふせ）（衣食住という財物を与える財施と、法を教え安心を与える法施と、他人の恐怖を除く無畏施とがある）与える喜びを知ります。

②持戒（じかい）（身口意の三業に関わる戒律を護持すること）してはいけないと思うことはしません。

③忍辱（にんにく）（他からの迫害や苦難に耐え、恨みを抱かないこと）感情に流されず、辛抱強くものごとにあたります。

④精進（しょうじん）（六波羅蜜を修めることを努力すること）するべきことに少しずつでも励みます。

⑤禅定（ぜんじょう）（坐禅を修行し、心を集中させること）心穏やかにすごします。

⑥智慧（ちえ）（智慧を得ること）ものごとの道理を、正しく、深く理解します。

それぞれに難しい修行になりますので、容易に完成することはかないませんけれども、お寺へのお参りの中で、少しでも心を安らかにし、この実践を目指していただきたいものです。

我々が春3月と秋9月に行う「彼岸会」には、お墓にお参りをし、お花や線香を供え、真心の合掌を捧げる修行が必要ですが、これはつまり、一度行ったから、後はほったらかしにするのではなく、何度でも何度でも繰り返し行うことが肝心なのです。

お寺とは、死者を追善供養する役割も重要ですが、亡くなってから、葬儀の場だけで会うのは寂しすぎます。お彼岸の機会にお参りに行った際、合わせて一言ご挨拶されるのも良いことだと思います。

お彼岸の前には、仏壇のお掃除はもちろん、仏具などもきれいにして、お花もかえます。花は樒（しきみ）が一般的です。お彼岸の入り日は、お仏壇に団子を供えます。中日（ちゅうにち）（春分又は秋分の日）には、おはぎやぼた餅を供え、明けの日には、再びお団子を供えます。この間、お霊供膳（れいぐぜん）、お菓子、果物も供えます。ご先祖さまや自然に感謝をささげる仏道精進の期間で日本独自の仏教行事なのです。

お彼岸にはお寺の法要やお墓参りに行き、亡き人へ思いをはせ、感謝のまことをささげます。紙面に限りがあるので伝わらない分部もあるかと思いますが、先祖を祭る大事な行事です。貴方がいるのはご先祖があってこそです。

暑さ寒さも彼岸まで、皆様にはお身体ご自愛下さいますようにお願い申し上げます。

◉

広報誌ご拝読に感謝申し上げます。有難うございました。

小林　国二　合掌。

副住職通信

「大本山總持寺にお米を送る運動のご案内」

例年ご案内させていただいております大本山總持寺にお米を送る運動ですが、本年も実施させていただきます。

昨年もお陰様で多くの新潟米を本山にお届けすることが出来ました。本年もご協力いただける方は左記の内容にてお寺にお米をお持ちいただくか、ご連絡をいただければ取りに伺います。

仏道修行に励む修行僧のために何卒ご協力の程お願い申し上げます。

記

◉平成二十九年度産の古米玄米。

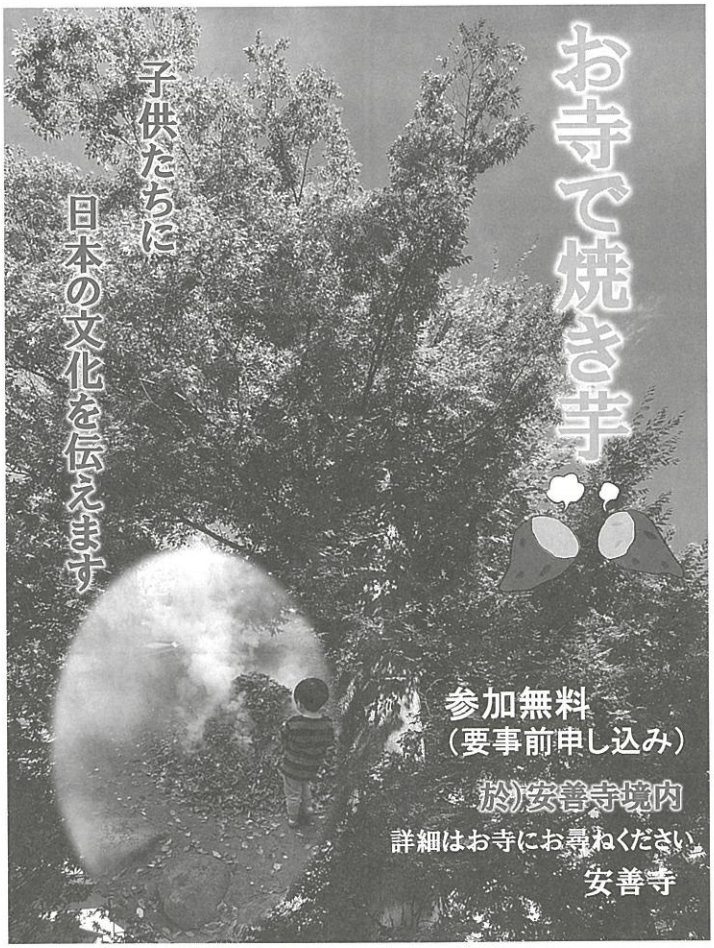
◉十キロ以上で米袋にお名前を記入。

◉締切り　十一月九日

「落ち葉で焼き芋のご案内」

一昨年ご好評いただきました「落ち葉で焼き芋」ですが、昨年は天候の関係で残念ながら中止を余儀なくされてしまいました。本年は天候を見ながら十月下旬から十一月初旬に開催を予定しております。

ご興味のある方は事前にご連絡をいただければ日程が決まり次第ご連絡させていただきます。五感で自然を体験できるイベントに多くの方のご参加をお待ちしております。



旅立ち

平成二十年七月末～八月末日まで

大塚エイ子様　八月七日寂
長岡市鉢伏

●

西片　進様　八月十三日寂
長岡市西新町

●

坂上　俊正様　八月二十五日寂
長岡市蔵王

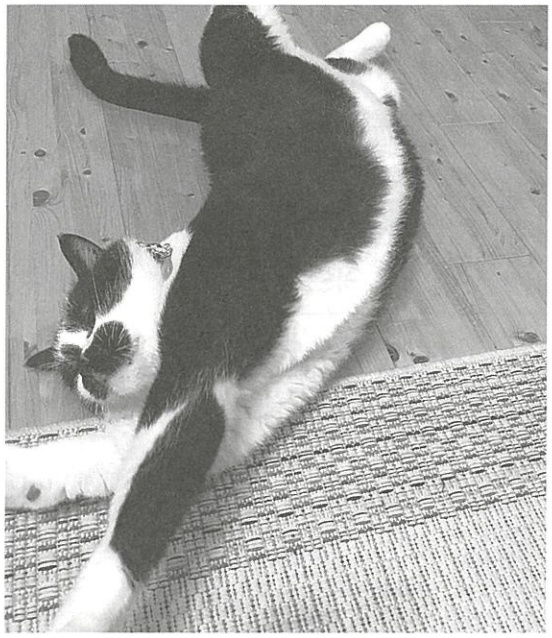
ご冥福をお祈りします。

第八十四号、新年号は平成三十一年一月一日(火)発刊予定です

ボブの独り言

猛暑の夏でしたね！

ボブの独り言



猛暑・猛暑・猛暑、天気予報はお日様マークばかり。燦々と降り注ぐ太陽の光は何物にも変えがたいものがありますが、この夏の太陽は、少し酷なものがありました。

庭の木々にホースで水をやるのは限界、どんどんしおれて茶色くなっていく紫陽花、満天星(どうだん)、この夏が終わったらどうなるんだろう？　心配で心配で…、そんな中それもお盆の十三日、恵みの雨が降ったのです。

その後、何日かしたら、枯れたと思っていた木々に次々と緑色の葉が出てきはじめました。もう、安心です。来年もきれいな花を咲かせてくれることでしょう…。

お盆と言えば、大阪に住んでいる二番目のお兄ちゃんが、家族を連れて里帰りをしてきました。一歳八ヶ月の女の子、真人君と悠真君にとっては、初めての「女の子」の従妹が可愛くて、抱っこも順番待ち、私も、モモちゃんがいなかったので、参加させてもらいました。

里帰り中には、大好物で長岡名物の「イタリアン」、「洋風かつ丼」をしっかりと食べ、充実した日々を過ごし、大阪に戻っていきました。今度会えるのは、晋山式でしょうか？

お天気が続いた頃の夜、悠真君が懐中電灯を持って庭に出て行き、夜の庭の光景(蟬の羽化)に魅せられてしまったようです。

それから何日か、「八時になったから庭に行こうよ！」って、懐中電灯を持って、時計を見ているのです。そんな、せがまれる日が数日続きました。せがまれる方も、時計を見ながら毎日催促されるのは楽ではないようです。

今では、蝉の聲に変わって虫の音が聞かれるようになりました…。この夏の暑さ、秋なんて来ないと思うようでしたが、しっかりと秋の足音が聞こえているのですね。

私は毛をカットしてもらったので、良かったのですが、モモちゃんは毎日、大量の毛が抜けて大変でした。ニャ～ン

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- ●思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- ●私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- ●教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- ●嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

編集雑感

季刊紙「蔵王山・安善寺」は平成十年三月に発刊され、間もなく二十年になろうとしています。今回が八十三号です。

どんなコンセプトで紙面を作るか。お寺の行事、ご住職の想い、お檀家さんの投稿など安善寺に係わる皆様の交流の一助となるものに出来たら良いな。そんな思いで編集してきたつもりです。

当初は子供でも解る安善寺という提案もあり小学生に投稿してもらったこともありました。何故子供でもという発想かというと、私自身が子供の頃大して意味も解らず、只なんとなく大人の見様見真似で手を合わしていただけ。小さい時から関心を持っていればもう少し真ともな大人になっていたかなとの反省でもありました。

例えば、お線香をあげるのはなんのため、お彼岸てどういう日、和尚さんと住職さんて同じなの違うの??等々。何気なく使っているけれど、それぞれ意味があることが解ってきました。今更かもしれませんが、和尚さん…人々に教えを説くお坊さんのこと(禅宗では方丈様とも云います)。住職さん…そのお寺に住み込んでいるお坊さんで代表役員のこと。この表現で子供に解ってもらえるでしょうかね。近藤龍弘和尚さんが安善寺の住職さんということになります。

その住職さんが交代する行事を晋山式(詳しくは前回号雑感を参照ください)といい、安善寺でも来年十月に龍弘住職さんから真弘住職さんへの晋山式が行われる予定です。お寺にとっては大変大きな出来事ですので、すでに準備が始まっています。お檀家さん挙げて盛大な式にして戴ければと願っております。

高橋潔